洋畫の先覺 高橋由一氏傳（一）

本編は故高橋由一氏傳にして、例言の示す如く既に剞劂に附して世に頒たれしものなりと雖も今多く之を傳へず。美術學校々友會月報の載する所により之を茲に掲ぐ。此編高橋由一氏の傳なりといふも吾が洋畫の歷史上決して看過す可らざるものに屬す。猶歷史の材たるの外當時の苦心以て參考す可きの資たる可し。

家嚴年六十有五に及びて難治の症に罹れり、不肖源吉其病間に就て、幼より見聞する所を手錄して、我家の子孫に傳へんことを請ふ、家嚴喜びて之を諾し、間に乘じ枕頭燈下、思ひ出づるがまゝ、一々に筆記して遂に一小册子を成す、不肖源吉に授けて曰く、余武藝と繪畫との外學ぶ所なし、是唯病餘消閑の偶錄のみ、其文字を爲さゞるは素より其所にして、我家の子孫これによりて、予が一生の梗概を知るを得ば足れり、必ず此稿を門外に出して我が愧を重さぬること勿れと、不肖源吉其敎を服膺して敢て人に示さず、而るに門生等、家嚴が病の久しうして癒へざるを以て、日々に訪ひ來りて、親しく家嚴が畫事に苦心せし當時の狀を聽かんと請ふ者極めて多し、家嚴話說の煩はしきに堪へず、遂に不肖源吉に命じて稿本を出して之を示さしめしこと屢々なり、於是門生等始めて手錄あることを知り、一覽せんと欲する者日に漸く多く、是亦其煩に堪へざるを以て、茲に又病床に侍り、聊か耳にする所を附記し、叙列して剞劂に附し、門生及知人に頒つことゝせり、觀ん人文の拙なるを尤めず、片瑣次叙なきも、家嚴が畫道に於ける一斑を知るを得ば、是實に不肖源吉が喜びに堪えざる所なり。

不肖　柳源吉謹識

下野國舊佐野城主堀田攝津守正衡家士
高橋源五郎嫡孫承祖
幼名猪之助後佁之助
又由一と改む

高橋由一

文政十一年二月五日生

生れて二歳、筆を把つて人面を描く、母之を奇とし後來望ありと稱す、其時同藩士中村要藏の妻つる子傍にあり、之を觀て此兒生涯倚るべきものは一机ならんと云へり。是れ成長の後、由一が母より傳聞せし話なり。實父は源十郎といへり、祖父源五郎の養子となり、母たみ子の良人たりしが、由一三歳に充たざる頃和せずして離別となりしかば、爾來由一は專ら祖父母實母の養育を受けぬ、九歳にして堀田正衡の近習を勤む、逐年昇轉して遂に近習長に進み、兼て圖書取扱を勤む、十二三の頃主家に出入せる狩野洞庭といふものあり、祖父由一を洞庭に托して傍ら運筆法を受けしめたれども、不滿足なりしかば祖父に訴へ、狩野探玉齋の門に入りて學びたり、されども繁務の爲め勉強の餘暇なきに苦み、遂に退きて獨學せり。壯年に至り漸く寸隙を得たるに、祖父源五郎は弓劔二術の達人にして、主命を奉じ汎く門下を教導せし人なる故、由一にも家業を繼がしめんとて、頻りに此二道を強いられしかば、百事を抛つて他を省みざりしが、生質多病にして動もすれば休業することあるより、或日祖父嚴に由一に向ひ、武術者と成らんもの身體健全ならざれば貫徹すべからず、汝尫弱にして武術者たらんこと望み難きものゝ如くなれば、今より性質好む所の畫學に換ふべし、弓劔二術の相續者は他の門生中に求むべしと宣ひしかば、夫より繪畫に從事せんと決斷せり。されども勤務多忙にして猶志を專にすること能はず、遺憾ながら獨學に時日を經過しけるに、恰も好し親戚萩原常五郎の紹介を得て、田安家の畫家吉澤雪菴の門に入り、北派の畫を學ぶことゝはなれり、然れども又繁務の爲め、未だ充分從學する能はざりき、嘉永年間或る友人より、洋製石版畫を借觀せしに、悉皆眞に逼りたるが上に、一の趣味あることを發見し、忽ち習學の念を起したれども其傳習の道を得ること難きより、日夜苦心焦慮しける中、官に請ふて海外人に隨ふの外あるべからずとの考へつきしが、其手續を得ること能はざれば、空しく日を送りしに又其前創設の蕃書調所には、萬一洋畫法を見聞するの一端を得ることもあるべしと思ひ當りぬ、よりて種種他人に要路を試問せしも便利を得ざりしが、幸ひに甲州産の道具屋利兵衛といふ者、麴町に居り入魂なりしかば、同人に尋問せしに同人の曰く、親戚なる同國人眞下專之丞氏、目下蕃書調所の組頭を奉職せり、速に同人に委托せば良結果あるべしと、由一これを聞き雀躍の餘り、厚く紹介を委托せしに、日を置きて眞下氏の答に本人の志願嘉すべし、調所内には夙に畫圖局あり、先輩の教官ありて學生を教導せり早く入學願書を出すべしとありし由通ぜられしかば、天にも昇る心地して、文久二年九月五日免許を得入學を終り、畫局教官川上萬之丞の指示を受け、通學勉學せり、追々畫學勉勵の廉を以て、同所頭取より命令を受け、從事したる次第順序は左の如し（由一畫局役員になりし後は、舊主より俗務を免され、專ら局務を全ふせり、）

文久二年十一月二十日畫學世話心得受命
元治元年十二月六日畫局出役介受命

肖像（トモヱ會出品）　伊東函嶺筆

四月の美術展覧會短評（二）

望雲子

○日本畫會第八回展覧會

年々當選百畫を出して、努めてゐる此會の今年の有樣は、さして進歩も無い代り、亦退歩も見えぬ。特色として例によつて見らるゝのは、一人二點と限つたこと、地方からの出品の多いこと、綺麗な畫の揃つてること、花鳥の多いことなどである。其態度が重く、從つて花やかでない代り、又際立つて惡いとはない、いゝやうでよくないやうで、一寸批評に困る、おとなしいやり方はむしろ瑕がなくて宜しいだらう。

元來吾子は非常の日本畫贔負で、大に趣味を持つてゐたものであるが、年と共に其趣味が段々に下つて來て、反對に洋畫の方が非常によく見えて來た。然し兩者の區別迄忘れることは決して無いと思ふが、著く今の日本畫の缺點若くは短處と感ずるのは、畫家の勉強とか苦心とかゞ一向に畫面に現はれて來ぬことで、畫に忠實なことが缺けてゐることだ。之が少からず同情を薄くしたものだらうと思ふ。必ずしも吾子許りの考でないだらう。然し之は日本畫も愛し、洋畫も之を賞する結果で、只だ日本畫に許り盲從してる人には分るまい。之に就ては日本畫會のみにいふのではないが、一般の畫家が、如何に洋畫を學ぶものゝ苦心するか、如何に忠實に意想の上に向上心を持つてゐるかを、注意して貰ひ度いものだと思ふ。之には洋畫を參考の爲に味はうとか、洋畫家と交際するとか、洋畫の研究法を知るとかいふ方便があらう。夫をしたからとて、日本畫の本領は沒しさへしなければ、必ず好結果を獲こそすれ、わるいことは決してない筈だ。

只だ千篇一律の用筆彩色を以て同じ畫題を繰り回すのでは、自家も飽かうし、觀者も飽く筈である。然し感心なのは此會の辛抱強いことである。今度の會に純粹の所謂花鳥が一番多く、然も夫が櫻とか鯉とか牡丹とか雞とかが大分。動物（花鳥に入る可き）を入れると三分の二以上山水人物が其次々といふ順序で山水といつてもおきまりのといつたやう。日本畫の特色（但し眠つたといはうか形ばかりといはうか）はあるが、其間の研究といふものは見えぬ。何とかさう樂な（未熟者にはさうでもあるまいが）もの許りでなくしたいものだと思ふ。さうすれば此會の重味は又更らに方面を變て出て來るだらう……。

先づイロハ順で中堅の審査員の作から評しやう。

川端玉章の『淡彩山水』別に評はない、苦のないといつたら此位苦のない描法はなからう。達者だからといつて用意のない、筆ばつかりといつて好いだらう。垣内雲嶙氏の『雨中嵐山』手に入つたもので、夫で眞面目なのが嬉しい。高橋玉淵氏『子孫長久』犬ころがころころしてるのは丁度厚味のない張子の犬で、繪といふとの極端を示し、夫で亦圓山派の缺點を容謝なくさらけ出したものだ。荒木十畝氏の『春の圖』暖な陽氣な色の菜の花をずつと廣く畫面を中斷して遠くに到つた所を見せ、之に派手な雉子をあしらつたのは、春といふ陽氣な綺麗な所を描き出して妙である。圖柄も思ひ切つたもので、色もよく出來てる、中々場中に立勝さつた作と覺えた。是等が先づ此會の極致をなすものだらうか。荒木探令氏の『山水』屏風はその嚴格な筆を以て丁寧に描いた所は取るべきだが、其他には躊躇せらるゝ。望月金鳳氏の『縱に猩』獨特の妙は之にも發揮せられて一種の面白味がある。其他小蘋、直彦、寛畝、寛友、永湖、永邨の諸氏の作は別にいふべき所を知らぬ。

次で出品畫に就て陳列順に少し眼立つたものを拾つて見ると、竹內蘆風氏の『初夏』當年の英氣は見られず、勉強した所も無い。畑仙齡氏の『老松』金屏風に思ひ切つて描いたもの、金屏風にしては先づ達者な無難と思はれる。諸星成章氏の『三大節』幼稚な意匠で、『壯嚴』はあたりまへ、骨惜しみか、不勉強かが見える。野口翠雲氏の『谿山幽邃』大きく出掛けたもので、勉強したものではある。松野霞城氏の『松澗野雞』戸田玉秀氏の『春雪群鴨』前者は綺麗で後者は淡泊。端館紫川氏の『御製歌意』例の小細工で何處迄も描くといふ流が少く、綺麗に筋の通つたよい出來。佐藤紫煙氏の『八重櫻』鮮かで綺麗を致してゐる。山口雲鳳氏の『春秋山水』動物畫のみ見馴れた此人の筆の山水にも中々達者なのには感心した、此勢ひで勉強されたら結構だ、然し少し大きく行き度いものと思ふ。江村隆章氏の『松下鳴栗』苦心の作と見える、勉強したものだが、筆と色に少し不調和があり、描き過ぎしか、趣味を減殺した氣味があるやうだ。平野千艸氏の『清流』布圖に好みをしてあつさり出來てる、然し前の杉の彩色は不注意だ。芝景川氏の『林間秋色』達者な筆で大きく出掛け、秋の趣を見せたのは氣に入つた。關田華亭氏の『墨松』能く描いてあるが例の綺麗物程に見えぬ。大八木也香氏の『春秋山水』力を致したもので、池上秀畝氏の『春暖』達者なものである。山川永雅氏の『新田義貞』丁寧に意を致したもの、山岡米華氏の『天保九如』筆と着想とよく整つてゐる。島崎柳塢氏の『新粧』只だ見る、婀娜たる妓女の裝ひに立てる所、しかもその達者な筆で一氣に描いた所で、俗氣を出てゝ瀟洒に見える所は感心、極彩色の氣のつまるやうなものより是等に於て達筆が見える。

○太平洋畫會展覧會

此會に就ては既に詳細な評が出てゐるので、敢て多くをいふの要がない許りか、場所の上からもさう許されまいから、只だ單に感じた所と統計的の一節のことを記すことにしやう。

ローランスの『ルーテル』は確に大に人を教へたと思ふ、吾子も其一人で、之につけても技巧の上の研究と其知識の必要などが大に感じらるゝ。猶此會の今後もかういふのを出すやうに努められたいものである。

之のあつた爲、會員の新作品は其光を減じたやうだが、然し年々の進歩は見えるので、會員のいづれもの苦心と研究の功は決して沒することは出來ぬ。然し中に二三の有力者の顔が見えなかつたのは如何いふ譯か、全體が氣を揃へて大にやるといふことは、會の外に對する勢力の上にも影響が大であらうと思ふ。之は今年の會の惜しむ可きことの一と見た。今後にはさうないやうにありたいものだ。

然し鹿子木氏の出品を多く努めた所は、滿谷氏の例によつて努むる所と共に大に多とする所である。大作の多いこと、二氏の外に河合氏、小杉氏、高村氏、沼邊氏などに見るべきが亦多とす可きである。其他水彩畫に大下、丸山、石井、木村の諸氏の作の多いことも亦推す可きで、吉田氏の遙々米國から多數の作を寄せたこと、新海氏の苦心の作を以て、その普通塑像の多い中に、意味あるものを示したなど、いづれも特記す可きことであらう。

然し作品の全體を見て、苦心の結果は價つけられるが、之を買ふものに然く垂涎を拂はしめたか如何かといふことは疑問ではあるまいか。全體の色の調子が陽氣でなくはないかといふこと、題目に人を惹くものゝ少くはないかといふことなど、多少研究に價するものではあるまいか。是等は美術家の外に對する責務として、はた殊に洋畫家今日の成す可きことゝして殘されてゐるものではなからうか。之は同會の諸士に向つて答を得たい所である。（終）